

令和7年度 学校経営報告書（自己評価）

学校番号	31	学校名	清水東高等学校	校長名	井島 秀樹
------	----	-----	---------	-----	-------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
ア	いじめの根絶	・いじめに対するトラブルの事前防止 ・いじめへの対処の確実な実施 ・ネットに関係するトラブル：0件 ・「誰に対しても相手の気持ちを大切に接している」と答える生徒の割合：95%	・いじめアンケートを実施した。（2回目は2月実施） ・トラブル：0件 ・スマートフォン講座を実施した。 ・95.6%	A	●いじめ案件1件（部内トラブル） ○いじめ対策委員会を複数回開催し、組織的に対応できた。 ○ネットに関するトラブル0件 ●授業や学校アンケートなどで、スマートフォンや1人1台端末の使用機会が増えている中、今のところ不適切な状況はないが、今後も引き続き生徒の様子を観察し使用方法について検討していく。
	授業中、部活動中、登下校中(特に自転車)の事故防止	・授業中の事故0件 ・登下校時の自転車事故件数2割減 ・職員対象のAED講習会の実施 ・校内活動中に熱中症重症者を出さない。 ・「保健だより」毎月発行	・0件 ・自転車事故件数6件（昨年度8件） ・職員対象の「救急講習」を実施 ・特に、体育の授業での熱中症防止を呼び掛け、校内活動中の熱中症重傷者の発生を防止した。 ・「保健だより」を毎月発行した。	A	○自転車交通事故は昨年度より2件減少。 ●交通事故件数は減少したが、加害者になる事故が複数件起きている。交通ルールの遵守とマナーに対して徹底していきたい。 ○熱中症重傷者が出ることはなかった。継続的に出さない対応をしていく。 ○静岡県学校保健会開催の「学校保健新聞コンクール」に生徒の作成した保健だよりを応募したところ、応募数26校のうち、高等学校生徒の部で特選（最上位の賞です）に選出されました。
	防災対策の充実	・Cラーニング、Googleクラスルームによる防災連絡（緊急連絡）訓練の実施 ・防災訓練を年2回実施	・防災訓練2回実施	A	○荒天時、JR運休時など、連絡の早期伝達に心掛けた。 ●もっとはやく連絡が欲しいとの要望や休校の要望もあり。
	学校施設の環境保全	・「ごみの分別・削減・環境を守る行動をしている」と答える生徒の割合：85%	・91.7%	A	○環境に配慮した行動がとれている。 ●美化委員による校内美化のための点検や呼びかけを継続して実施していく。

様式第3号

	感染症の予防	・「毎日の健康観察や手洗い・手指消毒・換気を行っている」と答える生徒の割合：85%	・全体91.3% 1年88.6% 2年90.0% 3年95.4%	A	○3年生は時期的に感染症予防に対する意識が高い。 ●コロナが第5類になり、対策の強化が緩まることで、この時期の3年生以外の感染症予防の意識がやや低下していると推測される。保健委員による呼びかけ等を実施していく。
イ	欠席、遅刻、早退の減少	・欠席数が過年度平均の8割以下となることを目指す。	・欠席数の合計は昨年より増加してしまった。	B	●不登校傾向にある生徒を減らす方策が必要である。 ●起立性調節障害等に対する理解と支援
	メンタル問題による不登校、転退学の減少	・「学校生活に満足している」と答える生徒の割合：80%	・93.2%	A	○3学年ともに90%を超え、学年が上がるほどに上昇している。 ○グループエンカウンターの実施により、入学当初に人間関係を構築するための貴重な機会を与えることができた。 ○Clearningにて案内したことで保護者のみの面談が増加。相談室利用者総数は増加。業務の分担をしたことで昨年度よりは担当者の負担も軽減できた。 ●不登校生徒に対するケア面談25件、遠隔授業実施総数8件
	部活動の充実、成績の向上	・「部活動が充実している」と答える生徒の割合：75%	・全体88.6% 1年91.3% 2年81.7% 3年92.8%	A	○活動時間や施設など限られた中で充実した活動ができています。 ○全国大会、東海大会等に出場する活躍をした部活動多数
ウ	主体的、対話的で深い学び、アクティブラーニングの推進	・全教員が講義形式に依らない授業展開の工夫を実践する。（各自学期に1回以上） ・生徒による授業評価を年2回実施 ・年間2回以上、他の教員の授業を見学した教員の割合：70%	・授業改善をテーマとする職員研修2回実施 ・生徒による授業評価を年2回実施することができた。 ・「グループ学習に積極的に取り組んでいる」と回答した生徒93.0%	A	○授業公開や指導主事訪問などの機会を活かすことができた。 ○教科を越えた授業の工夫や問題点を共有できた。 ○「自ら進んで授業に取り組んでいる」という割合が、学年が上がるほどに上昇している。
エ	SSH新制度の研究	・年間の指導計画と評価法を検証する。 ・本校のSSHの在り方、方針を共有する。	・3年間を通じた探究プログラムを完成し、改善しながら継続することができた。 ・認定校校としての本校SSHの在り方、方針を検討 ・認定校向け加速支援に申請するにあたり教育課程の一部を変更予定	A	○令和4年度の新教育課程の実施にあわせて開発してきた本校独自の探究プログラム「清高探究メソッド」を完成させた。 ○大学との連携、国際交流に注目して、認定校（加速支援）に申請できた。認可された場合、K-SISの単位認定の基準などの詳細を検討する必要あり。 ○認定校校として、さらなる発展を目指し、加速支援型への応募申請を行った。

オ	SSH活動の深化	・「課題研究を中心としたSSH活動は有意義である」と答える生徒の割合：80% ・不思議実験講座受講後、「理科がより好きになった」中学生の回答：3.5点（4点中） ・国立遺伝学研究所等への訪問は有意義だった」と答える生徒の割合：80%	・89.8%（【参考】理数科：93.5% 普通科：88.4%） ・3.7点（7月、20名対象）、3.8点（12月、29名対象） ・国立遺伝学研究所等への訪問は有意義だった」と答える生徒の割合：92.7%	A	○遺伝学研究所訪問について、講義・施設見学等、すべての項目で高い満足度が得られた。現在、遺伝学について行われている研究を学ぶとともに、小さな動機から研究につながることも知り、自身の研究への意欲を高めることができた。 ○理数科・普通科ともに課題研究を中心としたSSH活動を実施することができた。 ○SSH事業における年度当初の数値目標をクリアすることができた。 ○SSHの活動を、県の事業等を活用して継続することができた。
	「行きたい学校づくり」推進事業の充実	・他4校と連携した探究活動（生徒が関わる実践）：2回以上 ・2年普通科における大学生等との連携：各クラス2回以上 ・2年理数科における専門家との連携：各グループ3回以上	・他4校と連携した探究活動（生徒が関わる実践）：2回以上 ・理化学研究所訪問を実施。 ・2回以上実施 ・3回以上実施	B	●清水地区探究コンソーシアムの連携は深まったが、大学との連携はまだ十分ではない。 ○理化学研究所訪問。今回は他校生徒も参加。参加者全員が有意義だったと回答。物理学分野から医学発展へどのようにつながっていくのか、研究にAIがどのように使われているのかということを学び、これからの研究や進路決定について視野を広げることができた。
	基礎学力の定着（校内学力試験の利用）	・今年度の評価結果について分析する。 ・テスト返却1週間後の個票返却 ・「授業が分かりやすい」と答える生徒の割合：85% ・「指導のレベルに満足している」と答える生徒の割合：90%	・学習評価の傾向を過年度と比較したところ、概ね例年通りの結果であった。 ・88.2% ・92% 1年91.9% 2年91.4% 3年92.8%	A	○調査書の成績分布のA段階の人数がやや減少したが、概ね例年通りであった。 ○授業改善の成果と推察 ○理数科1年生全員が参加する東京大学訪問、国立遺伝学研究所訪問もほとんどの生徒が有意義であったと答えていた。大学進学や研究活動に向けての意欲を高めることができた。

様式第3号

カ	個に合った適切な進路指導、進路面談の充実	・進路に関する保護者会を実施。目標参加率：80% ・オープンキャンパスへの2年次までの参加：90% ・「進路実現に向けての1年間の自身の取組に満足している」と答える生徒の割合：70% ・「新旧担任連絡会や校内進路検討会が進路指導に役立った」と答える教員の割合：80% ・「進路講演会が生徒や保護者の進路理解に役立った」と答える教員の割合：80% ・「プロフェッショナルと語る会は有意義だった」と答える生徒の割合：80% ・「将来の進路について考えている」と答える生徒の割合：80% ・「大学・研究所等の訪問は意義があった」と答える生徒の割合：75%	・2年85%，3年83% ・担任と生徒・保護者の面談機会1回以上（生徒との二者面談，保護者との三者面談，保護者クラス会）については，1年3回，2年5回，3年6回（昨年度は1年5回，2年5回，3年6回） ・92% ・全体58% 1年53.3% 2年46.1% 3年75% ・84.8% ・100% ・92.7% ・67.1% 1年60.7% 2年64.2% 3年76.4% ・97%	A	○日頃から生徒や保護者に進路指導に関する情報発信を行うことにより、生徒保護者双方に進路実現に向けた課題意識を持ってもらうような取り組みを継続する。 ●3年生以外では低い値である。自分の目標や取組が進路実現にどのように関連しているのかという視点を持たせる必要がある。 ●進路講演会については教員研修の場としても考えたいが、他の業務と重なり参加できない教員がいるため、フォロー体制を考える必要がある。 ○進路保護者会の開催日は高校総体の日程と重なっていた。大会応援のため参加できない保護者が一定数いることを考慮し、後日動画配信をおこなった。 ○講師は謝金不要で来校。2講座受講可能としたことで、満足度も向上 ●目標を下回ったが、昨年比増加
	個の実力にあった文理選択（1年生）	・「学校で発行された『進路ノート』、『進学資料&合格体験記』、『最新大学情報』は進路を考えるうえで参考になった」と答える生徒の割合：75% ・不本意な文理選択となる生徒を出さない指導を行う。	・87% ・文理選択において担任、学年部で面談（必要に応じて複数回）を実施	A	○資料の有効活用が出来ている。 ○文理選択では概ね生徒の希望に沿った形で進めることができた。
	生徒会活動、ボランティア活動の充実	・「学校祭に満足した」と答える生徒の割合：80% ・各部活動で1回以上ボランティア活動をした割合：80%	・96.2% ・50.9%	A	○学校祭では企画運営から生徒が主体となって取り組み、生徒の満足度は非常に高い。教員側との連携を密にし、より質の高いものにしていきたい。 ●生徒会を中心にボランティア活動への参加呼びかけをしていく。

様式第3号

	研究旅行の充実	・「充実した研究旅行になった」と答える生徒の割合：80%	全体：97.8% 理数科：95% R07シンガポール 普通科：98.3% R07台湾	A	○最先端技術の研究見学。次年度は外国企業や大学の見学を企画 ○B&Sプログラム利用により、英語によるコミュニケーション能力の必要性や、互いの文化を尊重しながら学び合うことの意義を理解することができた。 ●適切な引き継ぎの重要性
キ	BYODによるICTを活用した授業の実践	・教育用アプリ（ジャパンナレッジスクール、ロイロノートなど）の活用：90%	・ICT機器を授業や学習に有効活用できていると回答した生徒は95.6%であった。	A	○ロイロノートなどが有効活用されている。 ●ジャパンナレッジスクールなど利用頻度が少ない。
	HP、広報活動によるアドミッション・ポリシーの実現	・探究活動を中心に教務部記事を月1回のペースで掲載する。	・全体としては月1回以上の更新。ただし、更新0がある。	B	○概ね月1回以上の更新 ●広報に対する意識高揚 ●保護者アンケートで、情報提供が少ないとのコメントがみられる。
ク	休暇取得促進日の設定	・休暇取得促進日に休暇を取得できる職員の割合：90%	・期間8/13～8/15 72.8%	A	●行事と重なる場合がある。 ○休暇取得推進日以外の休暇を含めれば、長期休暇期間において休暇取得率は100%
	業務の見直し、スクラップの推進	・印刷紙の使用量1割減を目指す。 ・19:30以降残留する職員が減少するように業務の割り振りを改善する。	・「保健だより」等の電子化 ・退庁時刻20:00設定。残留時には	A	○前向き、意欲的な教職員がより能力を発揮できるように、さらなる業務見直しを行っていく必要がある。 ○今後も印刷物の電子化推進 ○SNS連絡ツールを有効活用 ●残留職員の固定化
ケ	事務室運営の効率化	・前年度時間外勤務実績の縮減	・1人当たりの時間外勤務は、前年度に比べ約38%減少した。	A	○時間外勤務の時間数は縮減できたが、引き続き事務の効率化を図っていく。
	法令遵守の徹底	・会計監査・検査における指摘等1件以下 ・学校徴収金等の徴収、決算報告等に係る保護者への通知を確実かつ適時に行う。 ・個人情報の適正な保管による紛失及び漏洩事故0件	・会計の例月出納検査で注意事項が1件あった。 ・学校徴収金に係る通知について、おおむね適正に行うことができた。 ・個人情報に係る事故等は0件であった。	A	●法令に従いおおむね適正に会計事務を行うことができたが、より確認を徹底し、ミスをなくしたい。 ○県が定めた「学校徴収金等事務処理基準」に基づいた処理ができた。 ○個人情報の管理を適正に行うことができた。
	安全安心な教育環境の維持	・月2回以上の施設点検と法令点検指摘箇所の速やかな改修 ・施設・設備に起因する事故0件 ・学校経営予算の計画的な執行	・既定経費で修繕できないものは予算要求し対応したが、修繕までに時間を要したものがあった。 ・施設・設備に起因する事故は0件であった。 ・教職員の要望を聴きながら、予算を執行した。	B	●生徒の学習等に支障が出ないよう、緊急性・優先順位を考えながら、やるべきことは遅滞なく行っていく。 ○生徒が安全に授業等を受けることができた。 ○限られた予算の中で、おおむね計画的な予算執行ができた